

Letter for Members

【コンテンツ】

- 第125回学術大会 1
 - 第125回学術大会
 - 平成28年度専門医研修単位認定セミナー
 - 市民フォーラム
- 受賞者の声 5
 - 平成27年度学会優秀論文賞
 - 第125回学術大会優秀賞
- 歯科補綴学臨床研究のための医療統計学2日間
集中セミナー開催報告 15

公益社団法人日本補綴歯科学会

第 125 回学術大会

メインテーマ

「補綴歯科がめざすもの、求められるもの」

● 第 125 回学術大会開催

平成 28 年 7 月 8 日から 10 日まで、(公社)日本補綴歯科学会第 125 回学術大会を石川県金沢市の音楽堂ならびに ANA クラウンクラウンプラザホテルにおいて開催させていただきました。大会には総計 2,500 名の参加を頂き、北陸新幹線が開通したとはいえ遠路はるばる参加いただいた会員のみなさまには心より感謝しております。また、本大会を金沢において開催することに際しては、松村理事長の御英断と、蓮池会長を始めとする石川県歯科医師会の先生方の多大なるご支援があったからこそ実現したものであることに、ここに改めて御礼を申し上げる次第です。

開催のご案内でも述べましたが、金沢での開催に至った理由は、小京都といわれる町の一つとして(加賀 100 万石の前田家との関係はありませんが)私が個人的にも大好きな町であること、2015 年に新幹線が開通し関東地区からのアクセスが飛躍的に良くなったこと、さらに補綴学会の活動を福井、石川、富山の北陸 3 県の先生方に直接知っていただきたいと考えたためです。

本大会のメインテーマを「補綴歯科が目指すもの、求められるもの」としたのは、超高齢社会の先頭を進んでいる我が国において、補綴歯科が目指すこと、あるいは補綴歯科が他の歯科の領域の専門家から求められてい

るもの、さらには国民から求められていることを再考してみたいとの意図からです。ご参加いただいた会員の先生方はどのように受けとめられたでしょうか？

国際シンポジウムでは、Zarb 先生から補綴歯科分野にいち早くオッセオインテグレーションタイプのインプラントを北米で導入された経緯と、その意義について語っていただきました。また、MacEntee 先生には高齢者歯科における補綴歯科の役割についてお話いただき「simplicity」がキーワードあることを示していただきました。また ICP の前会長として共に活動した Gross 先生には「咬合」について特にインプラントに与えるべき咬合について考察してもらいました。これらの講演が今後の補綴の方向性を考えるヒントになったことをきたいしております。

大久保委員長を始めとした学術委員会が構成された多くのプログラムは、その一つ一つが興味あるものであり、本学会に参加していただいた「かい」があったものと思われまふ。大会長として企画させていただいた「臨床リレーセッションの 2, 3: インターディシプリナリーデンティストリー 補綴専門医は他分野から何を求められているか」において欲張って盛りだくさんにしたために、十分な時間がなく、若干消化不良にさせたかもしれません。しかし、この企画が発端となって、今後他学会や他領域の先生方の異なった意見を補綴学

会で聞く機会と、各大学で、他の領域の先生方との症例検討会が開催されて互いの理解がすすみ、患者にとって最も適した治療計画について意見交換できる基盤が形成されるようになることを心より願っております。

暑い金沢ではありましたが、幸い雨は1日目の午前で留まり、学会ばかりでなく金沢の美しい街並みと豊富な食材を楽しんでいただけたのではないかと期待しております。



初日の開場ひかえた会場に近い金沢駅前

最後になりましたが、学会の運営にご協力いただいた協賛会員の方々に御礼を申し上げるとともに、学会への演題登録、参加登録、現場での対応に関してご不便やご迷惑をおかけしたことに對してお詫び申し上げます。

どうか次回の横浜開催される第126回にもふるってご参加ください。

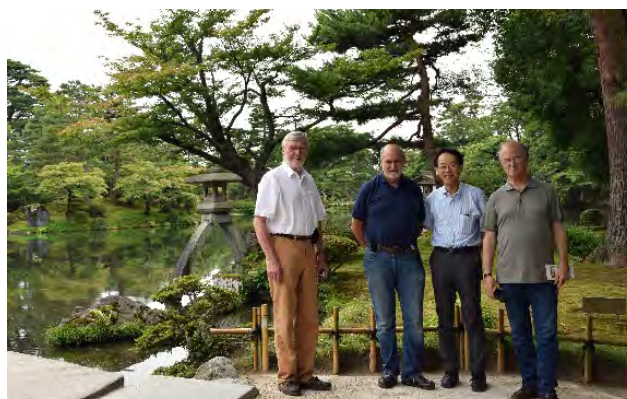
(大阪大・前田芳信)



会場の音楽堂正面玄関にて



老年医学会理事長 樂木先生の講演から



学会の前に兼六園の散策を楽しんだ MacEntee, Gross, Zarb の各先生



初日には受付が混雑しました。ご迷惑をおかけしました。



展示会場にも多くの方に来場いただきました。

●平成 28 年度専門医研修単位認定セミナー報告

平成 28 年度専門医研修単位認定セミナーは、平成 28 年 7 月 9 日（土）、10 日（日）の両日に第 125 回学術大会に併せて石川県立音楽堂にて開催された。9 日（土）には、臨床リレーセッション 1 として「有床義歯臨床の疑問に答える」というテーマで、鶴見大学の久保力廣先生の座長のもと 4 名の先生方による講演が行われた。まず、九州大学の松下恭之先生が「支台歯の選択と予後に関する補綴的戦略は？」と題して、部分床義歯における支台装置の予後に関する調査結果を参考に、支台歯を守ることが部分床義歯の良好な予後には不可欠で、支台歯にかかる力は欠損様式、咬合支持状態などによって大きく異なるため、欠損と力のバランスを考慮した部分床義歯の設計を行うことが必要であることが報告された。次に、九州支部の永田省藏先生が「可撤性支台装置は何が良いのか？」と題して、患者の高齢化に伴い、フォローアップや衛生管理の容易な可撤性義歯の設計が必要となり、クラスプだけでなくアタッチメントやテレスコープといった各種可撤性装置の特性を知り、上手に活用することが重要であることが示された。さらに、東京医科歯科大学の若林則幸先生が「連結装置は何を基準に選択するのか？」と題して、設計の大前提となる支持、把持、維持機能を見据えた連結装置の設計、特に十分な把持効果が発揮されるような大連結子と小連結子の活用、歯周組織の改善を考慮した大連結子の形態の配慮などについて症例を提示していただきながら説明をいただいた。最後に、東京歯科大学の上田貴之先生が「有床義歯装着後の評価とその対応」と題して、患者の主訴に応じた適切な咬合検査、咀嚼能力検査等を選択し実行しなければならないが、経時的に変化する口腔機能状態を十分に理解し、患者の状態を把握することが重要であると報告があった。

10 日（日）には専門医研修会として「パーシャルデンチャーの印象と咬合を考える」というテーマで、九州歯科大学の鱒見進一先生の座長のもと、3 名の先生方による講演が行われた。まず、東京歯科大学の山下秀一郎先生が「印象・咬合採得までに部分欠損歯列をどう診るか？」と題して、パーシャルデンチャーにおける咬合は残存歯の影響を大きく受けやすく、残存歯と調和のとれた咬合関係を確立する必要があることが示された。そのため、初診時における残存の咬合状態から最終補綴装置の装着時に付与される咬合への移行を円滑に進めていくための診断と義歯の設計を行い、適切な前処置を行うことが重要であることが報告された。つぎに、朝日大学の都尾元宣先生が「パーシャルデンチャーにおける印象採得の実際」と題して、硬組織である残存歯と容易に加圧変形する軟組織である顎堤粘膜とが混在していることがパーシャルデンチャーの設計を困難にしていることを踏まえたうえで、概形印象採得の重要性と種々の印象採得方法についての紹介があった。最後に、日本大学の石上友彦先生が「残存歯を考慮したパーシャルデンチャーの咬合」と題して、咬合負担能力の異なる要素を口腔内でバランスよく機能させるためには支持組織の負担能力、人工歯の性状を十分に踏まえ、咬合を安定させ動揺しないような義歯を設計することが必要であることが示された。

両セミナーにおいて各講演後にはディスカッション時間が設定されたが、会場内から多くの質問や意見が出され、活発な議論が行われていた。両セミナーとも専門医更新予定者ならび専門医申請予定者等多くの会員の先生方が聴講しており、盛況であった。専門医の臨床において更なるステップアップを目指すためのヒントが多く含まれており非常に有意義なセミナーであった。
(九歯大・榎原絵理)



臨床リレーセッション 1 風景



専門医研修会風景

●市民フォーラムのご報告

公益社団法人日本補綴歯学会第125回学術大会の併催企画として、本学会の社会貢献事業の一環である市民フォーラムを、平成28年7月10日、会場に隣接する金沢駅もてなしドーム地下イベント広場にて開催されました。

「最後まで人間らしく生きるために一口の機能は大切か？」というテーマのもと、座長の市川哲雄先生(徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学)による補綴歯科の紹介から口から食べることの大切さを踏まえた挨拶に始まり、杉政和先生(杉歯科クリニック(金沢市))と、小野高裕先生(新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学)のお2人が講師として紹介されました。杉先生の講演は「終末期患者のQOLを支えるオーラルケアより良い「食」と「生」のためにー」というタイトルで、今までのがん治療における終末期患者の口腔内への対応や、人口栄養による口腔内の影響を説明したうえで、食べられること、

口腔内をきれいにするのがいかにQOLを高めるかを様々な観点から、熱く語っていただきました。小野先生の講演は「見よう!知ろう!「そしゃく」の大切さ」というタイトルで、歯が残っていることでどれだけ食生活の満足度かわかるか、また食べるという行為が脳に与える効果等、咀嚼の重要性を分かりやすく解説されました。

途中、電源が落ちるというハプニングや、会場が少々暑かったことなどもありましたが、両先生からは非常に分かりやすく、しかも面白くご講演をいただき、参加された市民の方々も非常に熱心に聴講されており、高齢社会における口腔機能の重要性を知る非常に有意義な時間となったことと思われまます。

今回の市民フォーラム開催にあたり準備・運営に尽力されました、主幹校の大阪大学の皆様ならび関係各位にこの場を借りて心から御礼を申し上げます。

(東北大・佐々木啓一)



講演中の参加者の様子

平成 27 年度学会優秀論文賞, 第 125 回学術大会優秀賞
受賞者の声

平成 27 年度
学会論文賞



櫻井 薫 (東歯大)

Retrospective clinical outcome of nanopolymorphic crystalline hydroxyapatite-coated and anodic oxidized titanium implants for 10 years.

J Prosthodont Res 2015; 59(1): 62-70.

このたび栄えある学会論文賞を頂戴して、身に余る光栄です。本論文は現在目黒区でご開業の加藤英治先生が first author として、本学会の英文誌である Journal of Prosthodontic Research に掲載されたものです。内容は、ナノ多形結晶ハイドロキシアパタイトコーティングしたインプラントと陽極酸化チタン表面のインプラントに分けて、10年間の臨床成績を比較考察した臨床家に大変有益な論文です。この受賞を機に、さらにこれからも本論文のような有意義な論文を世に出していきたいと思うයි。また名誉あるこの賞に恥じないような活動をしていく所存です。



山田将博 (東北大)

Retrospective clinical outcome of nanopolymorphic crystalline hydroxyapatite-coated and anodic oxidized titanium implants for 10 years.

J Prosthodont Res 2015; 59(1): 62-70.

この度は、平成 28 年度日本補綴歯科学会学会論文賞を賜り、心より感謝申し上げます。また、ご選考いただきました諸先生方に改めて深謝いたします。日本補綴歯科学会の最高の賞の一つであると光栄に思っております。今回、Journal of Prosthodontic Research に連絡著者として誌上発表させていただいた

「Retrospective clinical outcome of nanopolymorphic crystalline hydroxyapatite-coated and anodic oxidized titanium implants for 10 years」という題名の論文を評価いただきました。

本研究は、表面性状のみ異なる同一インプラントシステムの 10 年間の累積生存率を比較し、インプラント表面性状が長期予後に与える影響を考察したものになります。一施設のみの後ろ向き研究ですが、対象となった表面性状は現在主流のものであるため、その長期臨床結果は多くのインプラント臨床に携わる方々にとって有益な情報となると考えます。さらに、インプラント表面性状をさらに発展させるヒントを基礎研究へフィードバックする臨床研究論文であると自負しています。

今回受賞させていただきましたことを励みに、研究成果を積み重ね、補綴治療のさらなる発展と国民の健康増進に少しでも寄与できるように研鑽を積んでいく所存でございます。最後に、共著者である東京歯科大学老年歯科補綴学講座・櫻井 薫教授および目黒区開業・加藤英治先生に、この場を借りて深く感謝申し上げます。そして、本学会の諸先生の皆様には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。



川良美佐雄 (日大松戸)

Rheological properties of elastomeric impression materials for selective pressure impression technique.

J Prosthodont Res 2015; 59(4): 254-261.

この度の受賞を大変光栄に存じます。また衷心より感謝申し上げます。

日々の臨床で疑問に思うことを検討し、その結果を以って社会に貢献できれば嬉しいことであります。私は、骨を削らない義歯を目標として、義歯印象において選択圧印象を行っております。意図する印象を成就させるためにはいくつかの要因を理解しておかなければなりません。それはトレーデザインと印象材です

が、特に印象材の粘弾性や硬化特性については、1970年代に遡らなくてはならないほど、参考資料が不足しておりました。それが近年の計測機器の進化により、stress control-type レオメータを用いて動的粘弾性が得られるところとなりました。これにより、各種印象材のトレー圧接直後に相当する時間における、粘弾性が理解できると思われまます。

一方、トレーデザインの相違が印象圧に及ぼす影響についても同時に検討を進めなければ、選択圧印象を確実にすることはできません。現時点で、上顎のトレーデザインと印象材の相違による印象圧の実際について検討を終えておりますが(J Prosthodont Res 2016; 60: 123-130)、さらに下顎についてもこれから報告してまいります。これらの検討により、私が長い間行ってきた臨床術式の変更を余儀なくされても、それは喜ばしいことと思っております。

今回の検討で献身的に協力していただいた、岩崎正敏先生、岩田好弘先生、および薦田祥弘先生に深甚なる感謝の意を表します。

◆ ◆ ◆
平成 27 年度
中堅優秀論文賞



村上 格 (鹿児島大)

Dry mouth and denture plaque microflora in complete denture and palatal obturator prosthesis wearers.

Gerodontology 2015; 32(3): 188-194.

この度は、平成 27 年度公益社団法人日本補綴歯科学会中堅優秀論文賞に選出していただき、誠にありがとうございました。

義歯は、誤嚥性肺炎の原因となる細菌のリザーバーとなり、免疫力の低下した高齢者や口腔腫瘍術後患者では誤嚥性肺炎が重篤化するリスクが高いことが報告されています。一方、細菌に対する防御因子を持つ唾液の減少は、その影響を直接受ける口腔内の細菌叢の均衡を崩壊させることが予想されますが、これまで口腔乾燥と義歯床粘膜面の細菌叢についての関係を分析した報告は見られませんでした。

本研究結果から、口腔水分量の低下した口腔乾燥状態では、義歯床粘膜面の総菌数は変化しないが、ナイ

セリア属が減少し、カンジダ属やブドウ球菌属など誤嚥性肺炎の起原菌が増加し、細菌叢が変化することが明らかになり、全身感染症予防の観点から、顎義歯装着者に対しては適切な口腔乾燥の診断と対応ならびに義歯の十分な清掃や管理を行う重要性が示唆されました。今後、高齢化の進行に伴い口腔癌罹患患者や口腔乾燥患者がますます増加することが予想されるため、本研究結果が義歯患者の QOL 向上や全身感染症予防の一助となれば幸いです。

最後に、本研究の機会を与えて頂きました長岡英一名誉教授ならびに西村正宏教授、ご助言、ご指導頂きました西 恭宏准教授、そして鹿児島大学口腔顎顔面補綴学分野の先生方に厚く御礼申し上げます。

◆ ◆ ◆
平成 27 年度
特定推進研究優秀論文賞



末永華子 (東北大)

Mechanobiological bone reaction quantified by positron emission tomography.

J Dent Res 2015; 94(5): 738-744.

この度は、平成 27 年度特定推進研究優秀論文賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。

生体と調和した有床義歯補綴治療の遂行にはメカノバイオロジカルな生体反応を把握し、それらを生体力学的観点からコントロールすることが重要です。我々は、骨代謝を量的、空間的に把握でき、時間反応性が高い NaF-PET/CT を用いて、義歯装着による力学的負荷により装着直後から床下骨組織の代謝回転が亢進しリモデリングが進むことを見出しました。さらに本論文では、NaF-PET/CT データから顎骨・義歯の有限要素モデルを作成、患者口腔内で実測した荷重データを用いて顎骨内応力を解析し、下顎骨各部位における応力値と、NaF-PET から計測した骨代謝指標 SUV とが相関することを見出しました。即ち NaF-PET/CT により、過荷重による骨吸収等の臨床上の問題が起こる前にその予兆である骨代謝活性の変化を把握できるということであり、今後は臨床応用を目指して更なる解析を進めていく予定です。

末筆ではございますが、終始ご懇篤なる御指導ならびに御鞭撻を賜りました本学大学院歯学研究所口腔システム補綴学分野の佐々木啓一教授、シドニー大学

の Qing Li 教授・Chris Peck 教授, クウェート大学の Mike Swain 教授, 並びに東北大学サイクロトロン RI センターの山口慶一郎教授に深甚なる感謝の意を捧げるとともに, 本研究を遂行するにあたり, ご指導やご協力いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

◆ ◆ ◆
平成 27 年度
奨励論文賞



大城和可奈 (九州大)

Effects of CaCl₂ hydrothermal treatment of titanium implant surfaces on early epithelial sealing. Colloids Surf B Biointerfaces 2015; 131:141-147.

この度は第 125 回日本補綴歯科学会学術大会におきまして奨励論文賞に選出していただき誠に光栄に存じます。

インプラント周囲軟組織は天然歯と同様の封鎖構造を示しますが, インプラント周囲上皮の封鎖性は天然歯の付着上皮より劣ることが報告されています。しかし, インプラント周囲上皮の封鎖性を向上させる有効な方法は未だ確立されておられません。そこで, 本研究ではカルシウムが上皮細胞-基質間の接着に不可欠であることに着目し, 高い骨伝導能をもつことが報告されているカルシウム水熱処理チタンの上皮に対する効果を検討することとしました。その結果, 動物実験・細胞実験共にカルシウム水熱処理チタンは接着性の向上を認め, さらに外来因子侵入阻止能も向上するという結果が得られました。これらのことから, カルシウム水熱処理チタンは上皮封鎖性を向上させることが示唆されました。

本研究によってカルシウム水熱処理チタンは骨組織, 軟組織ともに親和性をもつ表面処理であることが示唆され, 臨床応用が期待されます。また, 今後は本研究を足がかりにチタンと上皮組織の接着メカニズムの解明を行っていきたいと思います。

最後になりましたが, このような機会を与えて頂いた九州大学院歯学府口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野の古谷野潔教授, 鮎川保則講師, 熱田生助教, そして貴重なご意見を賜りました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。



佐藤雅介 (明海大)

Electromyogram biofeedback training for daytime clenching and its effect on sleep bruxism. J Oral Rehabil 2015; 42(2): 83-89.

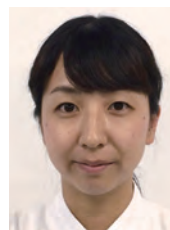
この度は, 平成 27 年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を受賞させていただき, 大変光栄に存じます。

本報告は日中のクレンチングに対する携帯型筋電系を用いた電子音によるバイオフィードバック訓練を行い, 夜間のブラキシズムの抑制効果を検証するという内容でございます。

バイオフィードバック訓練とは認知行動療法とも呼ばれており, 認知症の方などに既に様々な場面で応用されています。私どもの研究室では, 以前より岩手医科大学歯学部をはじめとする他大学, 異分野の先生方との共同研究を行い, 携帯型筋電系を用いた研究を進めてまいりました。この携帯型筋電系の研究は, 医工連携による新たな開発と応用を検討し, 今後もさらなる発展に向けて進行中です。しかしながら, 臨床応用に向けてはまだまだ越えなければならない課題が多く残されております。今回, 補綴歯科学会から賞を頂いたことで, 身の引き締まる思いでございました。これからも歯科医師であり, 補綴学を学んでいる臨床家として歯科への貢献ができるよう, 研鑽を積んでまいります。

末筆ではございますが, 本研究に多大なるご指導を頂きました藤澤政紀教授はじめ, 明海大学歯科補綴学分野の諸先生方に心より御礼申し上げる次第です。

◆ ◆ ◆
第 125 回学術大会
課題口演優秀賞



平岡 綾 (広島大)

筋萎縮性側索硬化症患者の摂食嚥下機能評価における舌圧検査の有用性

このたびは, 第 125 回日本補綴歯科学会学術大会におきまして, 課題口演優秀賞に選出していただき, 大変光栄に存じます。

筋萎縮性側索硬化症 (ALS) の主症状の一つに摂食嚥下障害が挙げられます。近年, ALS 患者の摂食嚥下障害と最大舌圧との関連についての報告がなされてい

るものの、舌圧検査を用いた ALS 患者の摂食嚥下障害の早期発見と対応方法は未だ確立されていません。そこで本研究では、ALS 患者の摂食嚥下障害と最大舌圧の関係及び早期発見への舌圧検査の有用性について明らかにするため、ALS 患者の最大舌圧と摂食嚥下機能との関係を経時的に検討しました。その結果、球麻痺症状が発現する際の最大舌圧のカットオフ値は 21.0 kPa であることが明らかとなり、最大舌圧が 21.0 kPa 以上の患者では、摂食嚥下機能低下はあまり認められず経口摂取について別段考慮する必要はないものの、21.0 kPa を下回る時期から食形態の変更や胃瘻造設といった対応を考える必要が生じることが示唆されました。本結果が、今後の臨床において、ALS 患者の摂食嚥下障害の早期発見、QOL の維持、改善に貢献することを期待しています。

最後になりましたが、本研究の機会を与えてくださいましたビハーラ花の里病院の皆様、また、御助言、御協力をいただきました広島大学大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 先端歯科補綴学研究室の先生方に深く感謝いたします。



黒嶋伸一郎 (長崎大)

脂肪組織由来幹細胞による薬剤関連抜歯窩治癒不全への硬軟組織治癒促進効果

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 125 回学術大会におきまして課題口演優秀賞をいただき、心より感謝申し上げます。

薬剤関連顎骨壊死 (Medication-related osteonecrosis of the jaw: MRONJ) は、発現頻度は低いものの、いったん発症すると極めて難治性の硬軟組織疾患であり、理想的な歯科治療を妨げて口腔関連 QOL を有意に低下させます。しかしながら MRONJ の病因は現在でも不明であり、決定的な予防法や治療方法は確立されていません。一方、脂肪組織由来幹細胞である Adipose-derived regenerative cells (ADRCs) は、再生医療の主軸のひとつを担う幹細胞移植の亜型として世界中で研究が行われており、自己から非培養で採取できることから、近年注目を集めている再生療法です。すでに医科領域では多方面で臨床研究が行われており、高い抗炎症効果が認められることが分かっています。そこで我々は ADRC 移植の抗炎症作用に着目し、ADRC 移植は MRONJ を治癒させると仮説を立てまし

た。本研究では高頻度発現型抜歯窩治癒不全モデルを作成して ADRC 移植を試みた結果、ADRC 移植は硬組織にも軟組織にも治癒促進効果をもたらすことを証明しました。ADRC は非培養で用いるために、承認のしやすさという点からも臨床応用化が実現可能であることから、今後は大動物での安全性の確認を経て臨床研究を行い、難治性で困っている患者を救うことができると考えております。これからも研究のための研究ではなく、基礎研究でありながらも臨床応用化を常に考えることができる研究を行えるよう邁進していこうと考えております。本当にありがとうございました。



帆足有理恵 (昭和大)

iPS細胞を用いた5-HT2A遺伝子多型をもつ睡眠時ブラキシズムモデルの確立

この度は第 125 回日本補綴歯科学会学術大会におきまして課題口演優秀賞に選出していただき大変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム (SB) は補綴治療予後を左右する重要なリスクファクターであると位置づけられていますが、その発症メカニズムはいまだ明らかではありません。先行研究により我々は、5-HT2A 受容体遺伝子 (HTR2A) の一塩基多型である rs6313 が SB と有意に関連し、rs6313 の C アレル保因者の SB 発症リスクが約 4 倍であったことを報告しました。今回、近年急速に進展した人工多能性幹細胞 (iPS 細胞) 技術を用いて、rs6313 の遺伝子型をもつ SB ならびに健常成人 4 名の末梢静脈血から iPS 細胞を樹立することに成功しました。iPS 細胞から誘導される神経細胞の前後軸、背腹軸に沿った領域特異性を利用し、SB ならびに健常成人から樹立した iPS 細胞を腹側後脳領域へと誘導することにより、セロトニン神経細胞が誘導でき、さらに HTR2A を高発現する神経細胞を誘導することに成功しました。本研究により SB に関連した遺伝子型を有する神経細胞の表現型を in vitro で検証可能な SB 疾患モデルを確立することができ、本モデルは SB の病因論、発症メカニズムの解明のために大きな役割を担うと期待されます。

最後に、本研究の遂行に際しご指導を賜りました馬場一美教授、慶應大学岡野栄之教授、順天堂大学赤松和土教授、そして貴重なご意見、多大なるご協力を賜りました諸先生方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

第 125 回学術大会 課題口演賞



檜垣宜明 (徳島大)

歯根膜からの感覚情報が前頭前野の活動に与える影響

この度、日本補綴歯科学会第 125 回学術大会において課題口演賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

昨今、高齢者の増加に伴って、認知症や軽度認知障害 (MCI) への注目が高まっており、歯の喪失が深く関わっていることも指摘されております。しかし、口腔機能が認知機能にどのようなメカニズムで影響を与えるかは明らかになっておりません。そこで、認知機能に関わっている前頭前野の活動と歯根膜感覚との関連性について、近赤外分光分析法 (fNIRS) を用いて、感覚統合の観点から検討しました。その結果、歯根膜という抹消の感覚情報と視覚、聴覚からの外部情報との感覚統合において、咬合力維持という運動タスクの成果向上に及ぼす影響は少ないが、前頭前野の活動にとっては重要なものであり、認知機能に大きく関与する可能性が示唆されました。

今後はさらに研究を進展させ、末梢からの感覚情報が前頭前野に与えるメカニズムを明らかにし、高齢による認知機能の低下の予防に貢献できればと考えております。

最後になりましたが、本研究の機会を与您ていただきました本学医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野の市川哲雄教授、後藤崇晴助教に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くのご協力を頂きました先生方、被験者の方々に深謝いたします。



大塚英稔 (明海大)

日中の咀嚼筋電図バイオフィードバック訓練が睡眠時の脳波に及ぼす影響

この度は第 125 回日本補綴歯科学会において課題口演賞に選出していただき大変光栄に存じます。

顎関節症の発症原因を含め様々な顎口腔系への弊害として覚醒時ブラキシズムおよび睡眠時ブラキシズムの関与が報告されています。本分野では、覚醒時ブラ

キシズムに対する咀嚼筋電図バイオフィードバック訓練の睡眠時ブラキシズム抑制への有効性を報告してきました。睡眠医学領域では、睡眠時ブラキシズムの発生が睡眠の質に影響を及ぼすことが報告されています。そこで覚醒時ブラキシズムに対するバイオフィードバック訓練が、睡眠時の脳波に及ぼす影響を調べる目的で本実験を行いました。その結果、バイオフィードバック訓練により、睡眠時の α 波の有意な減少と δ 波の増加が確認できました。また、睡眠質問票検査の結果から主観的に睡眠の質が向上したことが確認できました。以上より、覚醒時ブラキシズムに対するバイオフィードバック訓練は睡眠の質の改善にも有効な治療法となる可能性が確認されました。今後は被験者を増やしデータの追加をしていくことにより、バイオフィードバック訓練のエビデンスの蓄積に貢献できたらと考えております。

本研究の機会を与您て頂きご指導頂きました藤澤政紀教授をはじめ、研究遂行にあたりご協力ご助言を頂きました機能保存回復学講座歯科補綴学分野の諸先生方に厚く御礼申し上げます。最後に本研究にご協力いただきました被験者の皆様に深く感謝いたします。



久保田将史 (岩手医大)

歯の喪失が高次脳に及ぼす影響
-VBMを用いた脳容積の客観的評価-

この度は、日本補綴歯科学会第 125 回学術大会におきまして、課題口演賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。

近年の超高齢者社会の伸展に伴い、要介護者人口も急激な増加が見込まれています。要介護に至る主な原因疾病の一つは認知症です。この認知症に対しては、様々な分野で発症の予防や遅延のための研究が進められています。歯科領域においても口腔の機能低下と認知症との直接的な因果関係を解明するために、口腔機能の変化が脳機能に及ぼす影響について研究を進められてきました。しかし、ヒトの歯の喪失が脳に直接に器質変化を与えるメカニズムに関しては不明な点が多いのが現状です。

そこで、本研究では非侵襲的に脳萎縮の客観的な評価手法として注目されている Voxel Based Morphometry (VBM) を用いて、無歯顎者と有歯顎者における脳容積の違いについて比較検討を行いました。その結果、白質では有歯顎者群と無歯顎者群間に

有意な変化は認められませんでした。灰白質では海馬、尾状核、紡錘状回において有意な減少を認めました。このことから、歯の喪失は、海馬、尾状核および紡錘状回の容積を減少させる原因因子となることが示唆されました。今後、さらに研究を進め、口腔機能の変化と認知機能低下との関連についてのエビデンスを確立し、認知症予防に対する歯科医療の関与の重要性について示すことが出来ればと思っております。

最後に、本研究成果を発表させていただく機会を与えていただきました岩手医科大学近藤尚知教授、そして終始ご指導、ご鞭撻をいただきました岩手医科大学小林琢也准教授、当分野ならびに関係する諸先生方に感謝の意を表しますとともに、厚く御礼申し上げます。



小山絵理 (岡山大)

要支援・要介護高齢者における生命予後および低体重発生のリスク因子の検討

このたびは日本補綴歯科学会第125回学術大会におきまして、課題口演賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。

近年、要介護高齢者の機能低下や生命予後に関連するリスク因子の探索が多数の研究で行われていますが、本邦において、要介護高齢者を対象に口腔と死亡、低体重の関連を検討した質の高い縦断研究はほとんどありません。

そこで本研究では、要介護高齢者を対象に、生命予後および低体重発生のリスク因子を、口腔要因を含めて同定することを目的に前向きコホート研究を行いました。その結果、1年以内の死亡リスク因子として、高年齢、ベースラインにおける低体重、低ADLが同定され、1年後の低体重発生のリスク因子として、高年齢、ベースライン時の機能歯数の少ないこと、食事の自立度が低いこと、低栄養であることが同定されました。

これにより、可逆的な要支援・要介護状態においては、機能歯数の回復が低体重を改善する有効な治療オプションとなる可能性が考えられました。今後は、個々の高齢者の状況に合わせた、機能歯数の維持・改善を目標とする選択的補綴治療の有効性を明らかにするため、前向き介入研究を計画していきたいと思っております。

最後に、本研究の機会を与えていただきました岡山大学インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授をはじめ、多大な御指導・御助言をいただきました大野彩

助教、ならびに研究遂行にあたり御協力、御助言をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



中谷早希 (大阪大)

根管象牙質接着におけるリン酸、次亜塩素酸塩とスルフィン酸塩処理の効果

この度は、第125回日本補綴歯科学会学術大会課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、直接支台築造は広く歯科臨床で用いられています。しかしながら、支台築造における根管象牙質は接着性レジンとの良好な界面を形成することが困難であるとされており、その一因として、根管象牙質は歯冠部象牙質と比較して厚いスメア層を形成することが指摘されています。

そこで本研究では根管象牙質においてリン酸処理に続く次亜塩素酸ナトリウム処理によりスメア層と脱灰コラーゲン層を除去する方法と、それに加えてスルフィン酸ナトリウム処理する方法について、接着能評価のみならず表面元素分析、重合度解析を行い、評価しました。その結果、リン酸処理に続く次亜塩素酸ナトリウム処理に加えて、スルフィン酸ナトリウムで処理することで根管象牙質に対する接着能が向上すること、また次亜塩素酸ナトリウム処理後は水洗を行っても、象牙質表面にClやNaが残存していることが確認され、その後に適用するレジンの重合を阻害し、さらにスルフィン酸ナトリウムを作用させることで、レジンの重合度は回復することが明らかとなりました。本手法は、日常臨床に適用可能であり、より長期的に安定した支台築造が達成できると考えられます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただきました本学歯学研究科歯科補綴第一教室の矢谷博文教授、峯篤史助教に深謝致します。また、本研究を遂行するにあたり数多くの御協力を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。





植田淳二 (岡山大)

口腔粘膜上皮における角化因子の探索

この度は第125回日本補綴歯科学会において課題口演賞に選出していただき大変光栄に存じます。

口腔内には角化した角化歯肉と角化していない歯槽粘膜が存在します。そんな中、私は未だ不明な点の多い、歯の周囲に存在する角化歯肉が如何にして角化歯肉として存在しうるかに興味を持ち、本研究に取り組みました。その結果、角化歯肉に高発現している基底膜構成分子の一つである Laminin322 が角化歯肉形成に強く関与していることが明らかとなりました。しかしながら、Laminin322 のみが歯肉の角化を制御しているとは考えにくく、他の因子の関与の可能性が考えられます。本研究の最終目標は、外科処置を用いることなく、歯周状態の安定に必要な角化歯肉を増大する治療法を開発することであり、現在後輩の大学院生と共に、他の基底膜分子と歯肉の角化との関係を明らかにするため、さらに研究を進めております。

現在、私は上海の歯科医院で勤務しており、日本では経験することのできない治療法や疾患を経験することができ、その中で、新しい医療に繋がる発見ができたかと考えております。

最後になりましたが、本研究を実施する機会を与えてくださいました岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、分子医化学分野の大野充昭助教に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くの助言やご協力をいただきました先生方に深く感謝いたします。

第125回学術大会 デンツプライシロナ賞



窪木賢治 (医歯大)

ノンメタルクラスプデンチャーの有効性に関するランダム化クロスオーバー試験

この度は、(公社)日本補綴歯科学会第125回学術大会においてデンツプライシロナ賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。

本研究は、ノンメタルクラスプデンチャーの補綴治療効果を明らかにすることを目的として、東京医科歯科大学で実施され臨床研究です。これまで、ノンメタルクラスプデンチャーに関する臨床研究は後ろ向き研究がいくつか報告されておりますが、本研究は初めての前向き介入研究です。その結果から、臼歯部少数欠損に対する金属構造を用いた剛性のあるノンメタルクラスプデンチャーは、メタルクラスプを用いた従来のパーシャルデンチャーよりも高い口腔関連 QoL と満足度が得られる可能性が示唆されました。本研究の成果が、ノンメタルクラスプデンチャーの適用に関する根拠の1つとなることが期待されます。

学会等で作成される診療ガイドラインは、患者と医療提供者にとって重要な指針です。このような診療ガイドラインの作成に際しては、臨床研究によるエビデンスの蓄積が必須ですが、補綴領域においては質の高いエビデンスは未だ不足しております。今後も、補綴臨床上の重要課題に対する臨床エビデンスを提供すべく努めて行く所存です。

最後になりましたが、本研究は本学歯学部附属病院技工部のスタッフのご尽力により完遂することができました。演者を代表してここに感謝の意を表します。



南野卓也 (大阪大)

非破壊試験を用いた根管象牙質接着の新規評価法

この度は、第125回日本補綴歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライシロナ賞)に選出していただき、大変光栄に存じます。今回の研究発表は私が大学院生の間、興味をもって進めてきたものであり大変嬉しく思います。

本研究では、支台築造法におけるポスト孔内の接着様相の実態を把握することを目的として、光干渉断層装置(OCT)とX線マイクロコンピュータ断層撮影装置(μ CT)を用いて非破壊試験を行いました。観察の結果、支台築造後のポスト孔内の気泡や象牙質-レジン界面に存在するギャップが明示され、またOCTを用いたりアルタイム観察により光照射中のレジンの動的挙動を初めて捉えることに成功しました。本研究成果により明らかとなった根管象牙質への接着の問題点を解決していくことで、実際の臨床におけるよりよいレジン支台築造法の確立に向けて貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、本研究の機会を与えてくださいました本学歯学研究科 顎口腔機能再建学講座 クラウンブリッジ補綴学分野の矢谷博文教授ならびに終始懇切丁寧な研究指導をしていただいております峯篤史助教に厚く感謝申し上げます。また、数多くの助言をいただいた教室の先生方に厚く御礼申し上げます。



下元拓哉 (大阪大)

角化粘膜の存在がインプラント周囲組織の健康状態に及ぼす影響

この度は第125回日本補綴歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライシロナ賞)に選出して頂き大変光栄に存じます。インプラント周囲組織の健康状態を保つために角化粘膜が必要かどうかに関して、いまだ明確な結論は得られておりません。これまでにインプラント周囲の角化粘膜の必要性に関する研究は数多く報告されていますが、ほとんどの先行研究が単変量解析を用いており、口腔衛生状態や歯周病の既往といった交絡因子の影響を補正することができず、角化粘膜の存在そのものがインプラント周囲組織に及ぼす影響を評価することは不可能であったと考えられます。そこで本研究は、交絡因子を補正することができる多変量解析を用いることにより、角化粘膜の存在そのものがインプラント周囲組織の健康状態に及ぼす影響を明らかにすることを目的としました。結果、角化粘膜幅が2mm未満のものと2mm以上のものとの間に、プラークの蓄積量やプロービング時の出血、ポケットの深さにおいて有意差はみられなかった一方で、骨吸収においては有意差がみられました。以上結果より、幅2mm以上の角化粘膜の存在は、インプラント周囲の骨吸収の抑制に貢献する可能性が示唆されました。今後は、縦断的に検討を行い、本研究で明らかとなった関連について、詳しく解析を行っていただければと考えています。

最後に、本研究の遂行にあたり、ご指導をいただいた本学歯学研究科歯科補綴学第一教室の矢谷博文教授、中野環助教に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くのご協力を頂きました先生方に深謝いたします。



飯田 崇 (日大松戸)

下顎運動と舌挙上運動の相互作用が運動野の神経可塑性変化に与える影響の検討

この度は第125回日本補綴歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライ賞)に選出していただき大変光栄に存じております。

日常生活においてヒトは無意識下にて反復的な顎口腔領域の運動を行っておりますが、それらの運動が経時的に中枢へ及ぼすメカニズムについては不明です。顎口腔領域の反復的な運動が経時的に中枢へ及ぼすメカニズムを解明することは顎口腔領域における機能回復を目的とした歯科補綴学において有用な知見になると考えられます。本研究はデンマーク・オーフス大学との共同研究によって経頭蓋磁気刺激法を用いて運動誘発電位を測定し、舌運動と下顎運動を複合的に反復した場合の舌運動および下顎運動に関する運動野における神経可塑性変化について検討しました。その結果、舌運動と下顎運動を複合的に反復した場合における舌運動および下顎運動に関する運動野の可塑性変化は単独の運動を行った場合と比較して顕著に生じることが示唆されました。今後は顎口腔領域の反復的な運動が経時的に中枢へ及ぼすメカニズムについて、他の神経科学的手法を用いた検討を進める予定です。

最後に本研究の遂行にあたり、ご指導をいただいた川良美佐雄教授、小見山道教授、Peter Svensson 教授に深く感謝申し上げます。また、研究の遂行に多大な協力をいただいた薦田祥博先生、ならびにご協力、ご助言を頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます。



池谷賢二 (昭和)

MPCポリマーを用いたデンチャープラーク付着抑制の臨床評価

この度は、第125回日本補綴歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライ賞)に選出頂き、大変光栄に存じます。

現在でもレジンを用いた可撤性義歯は多く使用されており、レジン床義歯はその物理的性質上、口腔内細菌によるデンチャープラークを形成し易く、義歯性口内炎や誤嚥性肺炎の要因になることが報告されています。

我々は基礎研究で、タンパク付着抑制能をもつ

MPC (2-methacryloyloxyethyl phosphorylcholine) ポリマーを床用レジンにコーティングすることで、S.mutans のバイオフィーム形成を抑制することに成功しました。本研究では、MPC の共重合体である PMBPaz (MPC-co-BMA-co-MPAz) ポリマーを全部床義歯表面にコーティングし、デンチャープラークの付着抑制効果について臨床評価を行いました。その結果、様々な条件下において、PMBPaz ポリマーは全部床義歯へのデンチャープラークの付着とそれに伴うバイオフィーム形成を抑制できることが示唆されました。さらに PMBPaz コーティングは、従来の MPC を用いた方法に比べ、チェアサイドで簡単に行えるため、全部床義歯のバイオフィーム形成抑制において臨床応用に有用であることが示唆されました。

今後は、義歯への最適な適用方法やコーティング層の強化方法などを検討し、義歯性口内炎や誤嚥性肺炎を予防できるような汚れない義歯の開発を目指して研究を続けていきたいと考えております。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、ご指導をいただいた馬場一美教授、岩佐文則准教授、貴重なご意見を賜りました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。



三原佑介 (大阪大)

高齢者における筋力と口腔機能との関連

この度は、第 125 回日本補綴歯科学会学術大会において、優秀ポスター賞 (デンツプライ賞) にご選出頂き、大変光栄に存じております。

サルコペニアとなっている者では、咀嚼嚥下機能も低下することが考えられますが、これまでに全身の筋肉量・筋力と咀嚼、嚥下などの様々な口腔機能との関連について検討した研究はみられません。現在我々は、大阪大学医学系研究科、歯学研究科、人間科学研究科、東京都健康長寿医療センター研究所、慶應大学医学部による共同研究として、健康長寿の要因を探索する SONIC 研究を行っています。今回、SONIC 研究で得られたデータを用い、筋肉量より握力の方が多くの口腔機能と関連し、握力は、咬合力や舌圧を調整した上でも、咀嚼能率と有意な関連することが明らかとなりました。このことにより、握力の計測により、高齢者の口腔機能低下を予測しうることが示唆されました。

最後になりましたが、本研究の機会を与您えてくださ

いました本学歯学研究科 顎口腔機能再建学講座 有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野の前田芳信教授、池邊一典准教授、松田謙一助教、人間科学研究科の権藤恭之准教授、医学系研究科の神出計教授、ならびに東京都健康長寿医療センター研究所の石崎達郎先生、増井幸恵先生、百寿総合研究センターの新井康通先生に厚くお礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くの助言やご協力をいただきました先生方に深謝いたします。



第 125 回学術大会 カボデンタル賞



若林一道 (大阪大)

大阪大学歯学部附属歯科技工士学校におけるデジタルデンティストリー実習

この度は、第 125 回日本補綴歯科学会学術大会におきまして、カボデンタル賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本学歯学部附属歯科技工士学校で顎口腔機能に関する講義を行っていますが、座学による教育では、実際の顎の動きがどのように行われているか、それが補綴装置の製作にどのように影響を及ぼすのかを、臨床経験のない学生に教授することは難しいものと思われました。一方、補綴分野において、CAD/CAM システムを用いた治療が一般的に行われるようになり、数多くの利点をもたらしました。しかし、医療機器は日々進歩しており、より高度な補綴装置の製作が可能な歯科技工士を育成するためには、産学連携により最先端のシステムを用いた医工学教育が必要です。そこで、昨年度より、歯科技工士学校学生に最新の顎運動計測装置や CAD/CAM システムを用いたデジタルデンティストリー実習を行っています。本実習について、多くの学生から高い満足度が得られており、今後も最新のデジタル機器を使用し、顎運動の計測からクラウンの製作までといったデジタルデンティストリーの一連のワークフローを学習できる、講義・実習を行っていきたいと考えています。

最後に、本実習の機会を与您えて頂きました矢谷博文教授、竹重文雄教授、本実習の遂行に多大なご尽力を頂きました歯科技工士学校 町 博之先生、カボデンタルシステムズジャパン小松原崇様とスタッフの皆様

様、医工連携についてご指導いただきました本学医学部倉智嘉久教授、実習当初より様々なご協力をいただきました高梨知宏様、そしてご助力頂きました多くの皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



村上 格 (鹿児島大)

開窓療法後に適用した栓塞子の予後に関するコホート研究

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第125回学術大会におきましてカボデンタル賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。

良性腫瘍や顎骨嚢胞の病巣が大きい場合、開窓療法が行われ、開窓部の保持のために栓塞子が適用されます。これまで、栓塞子の設計と治療成績の関係については詳細な検討が無く、栓塞子は病巣が治癒すれば撤去されるため、その設計の違いが撤去までの期間に影響を及ぼす可能性が考えられました。本研究では、良性腫瘍または顎骨嚢胞の診断のもと開窓術を受け、術後に栓塞子を装着した患者を対象に、歯牙欠損の有無、病巣の前後的位置ならびに頬舌の開窓方向によって3種類の栓塞子が適用され、栓塞子の種類、装着期間ならびに栓塞子の撤去に関連する要因をカルテ調査し、生存分析を行いました。その結果、3種類の栓塞子間における生存率に有意差は認められず、栓塞子の設計の違いにかかわらず開窓部は効果的に保持されることが示されました。また、嚢胞であること、前歯部の病巣ならびに咬合面方向からの開窓が栓塞子の撤去に関係する大きな要因として同定され、栓塞子の装着後は、原疾患の種類、病巣の前後的位置ならびに開窓方向に留意して経過観察すべきであることが示唆されました。

最後に、本研究の機会を与えて頂きました西村正宏教授、ご助言、ご指導頂きました西 恭宏准教授、そして鹿児島大学口腔顎顔面補綴学分野の先生方に厚く御礼申し上げます。

「歯科補綴学臨床研究のための医療統計学2日間集中セミナー」 開催報告

歯科補綴学ならびに補綴歯科臨床分野における臨床研究を実施するには医療統計学が必須のツールですが、本邦では医療統計学を系統的に学ぶことのできる機会が少なく、研究者の多くは独学で解析にあたっているのが実情です。

幸いにも本学会では、臨床統計疫学の専門家である大阪大学の新谷 歩教授から、学術大会やシンポジウムを通じてその一端を学ぶ機会を得てきました。しかし、1、2時間の座学のみでは研究に必要な医療統計学の知識を学ぶにはあまりにも短いと言わざるを得ないのが現状です。

そこで、新谷教授に2日間の集中講座の開設をお願い申し上げたところ、快くお引き受けいただけたため、医療統計学の知識を渴望する歯科補綴学分野の研究者を対象とした臨床研究のための医療統計学2日間集中講座を企画いたしました。

理事長の松村英雄先生を始め、理事の先生方には、本セミナーの開催にあたり多大なご協力をいただき感謝申し上げます。

梅雨も明け夏真っ盛り、最高気温は35度の猛暑日の大阪、7月30日(土)、31日(日)の両日、新谷先生の研究室がある大阪大学大学院医学系研究科附属最先端医療イノベーションセンターの1階マルチメディアホールには、日本中から114名の参加者が集まりました。

参加者の内訳は、北海道大学1名、岩手医科大学2名、東北大学6名、日本大学松戸歯学部1名、東京医科歯科大学7名、日本歯科大学2名、東京歯科大学9名、昭和大学7名、明海大学3名、鶴見大学1名、神奈川歯科大学8名、新潟大学1名、日本歯科大学新潟生命歯学部2名、愛知学院大学2名、朝日大学5名、大阪大学29名、大阪歯科大学1名、兵庫医科大学2名、徳島大学4名、岡山大学2名、九州大学8名、福岡歯科大学5名、鹿児島大学1名、開業医・勤務医6名でした。本セミナーは本学会の公益事業として開催され、参加費は無料であり、114名中5名は非会員からの参加者でした。

1日目は午前10時から午後6時30分まで、新谷歩教授のイントロダクションから始まり、山本紘司准教授、石原拓磨助教から、p値とは、統計テストの選び方、統計解析ソフトについて、平均値の比較(スチューデントのT検定、マンホイットニーのU検定、対応のあるT検定)、多重性の問題(分散分析、クラスカルワリス検定、フリードマン検定)、線形回帰、比とロジスティック回帰(リスク比、レート比、オッズ比、ロジスティック回帰)、交絡の調整、生存時間解析(Kaplan-Meier 曲線、ハザード比とCox回帰)について、事前に各自が自習した「みんなの医療統計」(新谷 歩著、講談社)を基に、EZRを用いて演習問題を解いていく形式で進められました。



2日間のセミナーを終えて、右から矢谷博文理事、新谷 歩教授、山本紘司准教授、石原拓磨助教、臨床統計疫学の知識を正しく伝えようとする熱意に、参加者一同敬服いたしました。

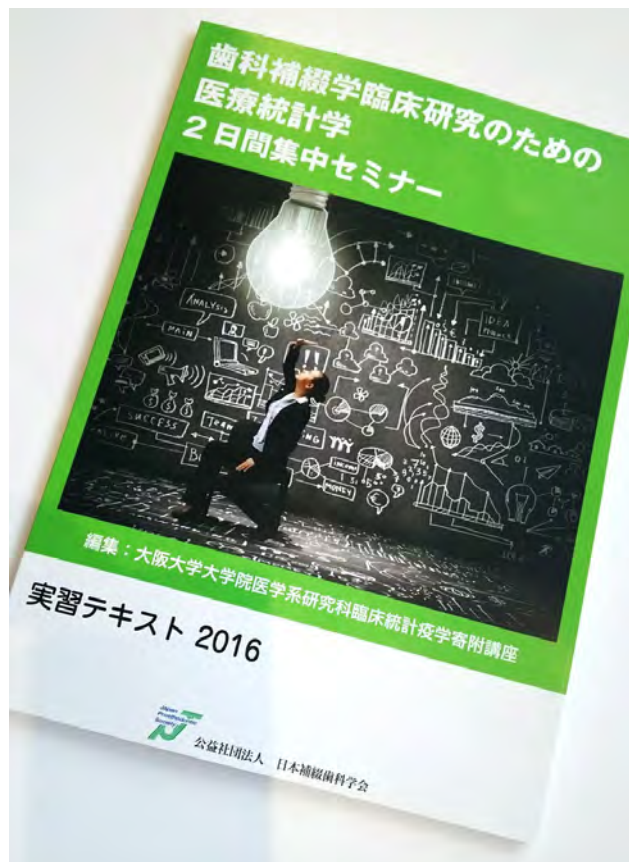


ほぼ満席となった演習風景。なお、参加者の姿がよく見えないのは、備え付けのPCおよびモニターが立ちはだかっているせいです(笑)。

続いて迎えた2日目は、午前10時から午後7時までお昼休憩を挟んだ8時間にわたり、新谷 歩教授から情熱的なご講演をいただきました。応用編として、多変量回帰モデル①(線形回帰)、多変量回帰モデル②(交絡の調整と傾向スコア)、多変量回帰モデル③(インターアクションの解析)、反復データの解析(Mixedモデル、GEE)についての演習が、100ページ以上の分厚い当日テキストを用いて行われ、最後は1時間におよぶ質疑応答で締めくくられました。

両日とも、大阪大学大学院医学系研究科 臨床統計疫学寄付講座からは、新谷 歩先生、山本紘司先生、石原拓磨先生の3名の講師陣と、統計補助スタッフとして教室の加葉田大志郎先生、高橋佳苗先生、橋本治子先生の3名の先生方にも加わっていただき、懇切丁寧にご指導いただきましたこと、心より感謝申し上げます。16時間以上に及ぶ演習と濃密な内容のセミナーテキストは、参加者にとって今後非常に有益な研究の支えになることと思います。

最後になりましたが、本セミナーの運営に協力していただいた事務局員の木村佳子氏、参加者として必死で勉強しながら運営を手伝ってくれた多くの教室員に心から感謝いたします。(大阪大・矢谷博文、石垣尚一)



当日配布された分厚いセミナーテキスト。表紙デザインは当教室の若林一道助教によるものです(ポスターもです)。ありがとう。

【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局(jpr-edit01@max.odn.ne.jp)まで、メールにてお寄せください。